

JICS REPORT

[ジックス・レポート]

財団法人 日本国際協力システム

2007

Sept.
No. 66

2007年9月18日【編集発行人：櫻田 幸久】
発行：（財）日本国際協力システム
〒162-0067 東京都新宿区富久町10番5号 新宿EASTビル
Tel 03-5369-6960 / Fax 03-5369-6961
E-mail: jics@jics.or.jp / http://www.jics.or.jp

特集

アフガニスタン支援とJICS

「平和の定着」に向けて

タリバン政権崩壊から6年、日本をはじめとする国際社会の支援のもと、アフガニスタンでは民主的な憲法が制定され、正式な政府と議会が創設されました。アフガニスタン政府と国民は自らの力で新しい国づくりに取り組んでいます。しかし依然として治安をはじめ困難な課題に直面しており、国際社会の継続的な支援が求められています。このようななか、日本は、「平和の定着」のためのさまざまなプロジェクトを実施しており、JICSは調達代理機関としてその一翼を担っています。

日本は、アフガニスタンでの「平和の定着」を実現するため、和平プロセス支援、治安の改善、復興支援を3本柱とした取り組みを実施しています。JICSも、研究支援無償を使った地雷除去機や地雷探知機の開発研究で、安全管理を含めたプロジェクトの実施管理と資金管理を行ったり、カブール警察への無線機材、パトロール車両の調達監視（一般無償）を行うなど、治安の改善のためのプロジェクトにかかわってきました。警察への支援は、その後、カンダハル、マザリシャリフ市警察（以上、緊急無償）、カンダハル・ハイウェイポリス（見返り資金*プロジェクト）に対しても実施されています。こうした地方への支援は、「地方支援の拡充により和平プロセスを支える国民の支持を増進する」という日本政府の考え方に基づいたものです。

復興支援では、2001年度、2002年度に基礎医療器材などを調達（緊急無償）、さらに2004年から3度にわたり、各病院で機材の使用状況の調査を実施し、必要な交換パーツを調達するとともに、各病院に日本人技術者を派遣し、アフガニスタン人医師と機材保守管理担当者に部品交換や維持管理に関するトレーニングを再度実施するなどのフォローアップも実施しました。

また、アフガニスタンでは、20年以上にわたる戦火により、全土を結ぶ幹線道路に激しい損傷を受け、交通が麻痺しています。早急な道路輸送網の整備は復興と経済社会開発のための前提という認識で、アフガニスタン政府はインフラ整備を国家の重点開発分野のひとつとして掲げています。そし

CONTENTS

P-1
3 **【特集】**
アフガニスタン支援とJICS
「平和の定着」に向けて

P-4 **【OPINION】**
アフガニスタン道路建設への
支援に感謝
アフガニスタン公共事業省 副大臣
ワリ・ムハンド・ラスリ

支援の最前線に立つJICSマンの
気概に感服
茨城大学人文学部教授・
JICA客員国際協力専門員
杉下恒夫

P-5
7 **【TOPICS】**
ジャワ島中部地震災害
JICS評議員会会長の視察と
ある小学生自由研究との出会い

感染症対策
VVM（ワクチンバイアルモニター）
普及に貢献
WHOより表彰を受ける

P-7 **【NGO紹介】**
環境修復保全機構（ERECON）
タイ・デンチャイでの堆肥化
による環境保全型農業

P-8 **【JICSのうごき】**
2007年度第1回通常評議員会・
理事会を開催

大島海洋国際高等学校生が
JICS業務を体験

【在外勤務者リレーエッセイ】
(超) 高地ネタ

在ボリビア日本大使館外向 三上綾子

【お知らせ】
キッズ向けホームページ
『JICSとは』完成

カンボジア地雷DVD完成

て、道路を中心としたインフラ整備にも、JICSはかかわってきました。

生活と経済を支える 道路整備

マザリシャリフ市内道路改修計画 カブール道路技術センター整備計画

カブール・カンダハル間幹線道路(KK道路)、カンダハル・ヘラート間幹線道路(KH道路)に引き続き、JICSがアフガニ



マザリシャリフの道路掘削作業



マザリシャリフの道路舗装作業

スタンで行う道路セクター・プログラム無償となったのが、マザリシャリフ市内道路改修計画とカブール道路技術センター整備計画です。

セクター・プログラム無償は、被援助国が策定する分野(セクタ

ー)別の開発計画の実施のために活用される資金協力で、通常の一般プロジェクト無償より迅速で柔軟な対応が可能になります。

復興のための道路整備では、KK道路やKH道路のような幹線道路の整備とともに、地方の中心都市の道路整備、さらにアフガニスタン人自身による道路網の復旧、整備された道路の維持管理機能の強化を推進することも必要です。

日本とアフガニスタン両政府は、2005年11月28日に、マザリシャリフ市内道路改修計画に対して、無償資金協力を実施することを合意しました。マザリシャリフは、アフガニスタン北部の中心都市であり、「平和の定着」に向けて、日本の提唱している農業分野を中心とした「地方総合開発」の重点対象地域にもなっています。また、かつて巡礼観光都市のひとつとして栄えていましたが、内戦により道路が激しく損傷していました。この案件に関してもJICSは資金管理、入札手続き、施行業者との契約、施行状況管理などの調達監理を実施し、2007年3月に無事工事は完了しました。マザリシャリフ市内の交通環境が改善されたことにより、住民の経

済活動が活性化され、従来の巡礼観光都市としての復興に寄与することが期待されています。

一方、カブール道路技術センターは、内戦により既存の施設が破壊され、ほとんど機能していない状態にあります。そこで、施設の改修・再建と修理機材の調達を行うとともに、現地技術者のスキルアップを目的とした調達機材の初期操作・運用(一部機材の据付)指導を実施し、継続的な建設機械・車両の維持修理の実現をはかろうというのが、カブール道路技術センター整備計画です。アフガニスタン政府は全国を8つの地域に区分し、それぞれの地域の維持管理機能を強化、再編していく方針を示しており、今回のカブール道路技術センター整備計画はこの流れの一貫として実施されるものです。この件に関して日本とアフガニスタン政府は2007年2月13日に無



マザリシャリフ市内道路の改修前と改修後

アフガニスタンにおけるJICSの活動

*実施中の案件を含む

バーミヤン

- バーミヤン市警察向け機材(見返り資金プロジェクト)

ヘラート

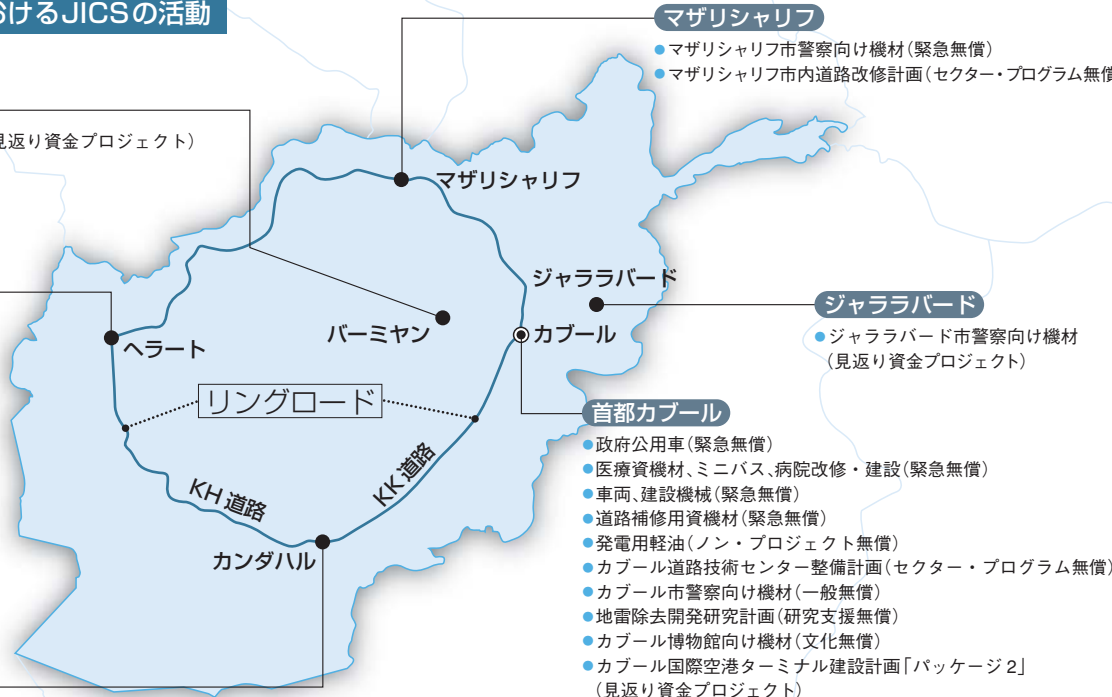
- ヘラート市警察向け機材(見返り資金プロジェクト)

カンダハル

- カブール・カンダハル間幹線道路改修計画(セクター・プログラム無償)
- カンダハル・ヘラート間幹線道路改修計画(セクター・プログラム無償)
- カンダハル市警察向け機材(緊急無償)
- カンダハル高速警察支援(見返り資金プロジェクト)

マザリシャリフ

- マザリシャリフ市警察向け機材(緊急無償)
- マザリシャリフ市内道路改修計画(セクター・プログラム無償)



ジャララバード

- ジャララバード市警察向け機材(見返り資金プロジェクト)

首都カブール

- 政府公用車(緊急無償)
- 医療資機材、ミニバス、病院改修・建設(緊急無償)
- 車両、建設機械(緊急無償)
- 道路補修用資機材(緊急無償)
- 発電用軽油(ノン・プロジェクト無償)
- カブール道路技術センター整備計画(セクター・プログラム無償)
- カブール市警察向け機材(一般無償)
- 地雷除去開発研究計画(研究支援無償)
- カブール博物館向け機材(文化無償)
- カブール国際空港ターミナル建設計画「パッケージ2」(見返り資金プロジェクト)

JICS 独自事業として

- ① ミニコミ誌に対する助成
- ② 孤児院へのオモチャの寄附
- ③ バス輸送支援

償資金協力を実施することに合意、これを受けて2月22日、JICSはアフガニスタンと調達代理契約を締結しました。

国際空港の改善による 安全対策の強化

カブール国際空港ターミナル 建設計画パッケージ2

2006年12月20日、JICSはカブール国際空港ターミナル建設計画パッケージ2について、アフガニスタンと調達代理契約を締結しました。

現在、アフガニスタンでは、一般無償によるカブール国際空港ターミナル計画



カブール国際空港ターミナルの新駐車場予定地

がパッケージ1として実施されています。パッケージ2は、このパッケージ1に付随する施設の工事を、アフガニスタンがノン・プロジェクト無償で積み立てた見返り資金を使用して実施されるものです。

既存の旅客ターミナルビルは、ピーク時の旅客を取り扱うには床面積が絶対的に不足しており、必要な設備も足りない状況です。そのうえ国際線と国内線の旅客が混在しており、対テロ対策としての厳重な安全対策ができないという問題が発生しています。そこで、パッケージ1で主に新たな国際線専用ターミナルの建設を、パッケージ2では駐機場、駐車場とサービス道路を建設する



カブール国際空港管制塔からプロジェクトサイトを望む



改修前のカブール道路技術センター

こととなりました。このプロジェクトにより、カブール国際空港の改善による安全対策の強化、輸送力の増強、スムーズな入出国が期待されています。

JICSは、この案件でもアフガニスタン政府の調達代理機関として、進捗管理（入札開催、業者契約などを含む）と資金管理を実施します。

***見返り資金：**開発途上国政府が、日本の資金協力によって調達した物資の価格の一定額を現地通貨で積み立てる資金で、原則として、日本政府と合意のうえで自国の社会経済開発に資する事業などに使用することができる。無償資金協力ではノン・プロジェクト無償、貧困農民支援、食糧援助などの事業において実施される。

From the site

カブール事務所便りより

何度か引越し

2003年4月、JICS初の海外拠点として、JICSアフガニスタン事務所が開設されました。日本からの駐在員は当初1人。その最初の駐在員が1年後にアフガニスタンを去るときに、「在任中に2回の引越しをして、現在の事務所は3カ所目です。この間、ナショナルスタッフは2人から10人十1頭（番犬）に増えました」と述べています。

最初の事務所は、ホテルの1室でした。ところが、2003年11月、このホテル敷地内で爆弾テロ事件が発生、幸いJICS関係者にけが人はなかったものの、事務所を住宅街の一軒家に移転しました。

閉塞状況の救いは地元の人々

初の直接選挙による大統領選挙が2004年10月9日。この時期に赴任していた所長は、「選挙や誘拐事件やらで外出は禁止となり、かなり閉塞的な環境下で生活と仕事をせざるを得ない状況になってしまったのは残念でした」と離任時に振り返っています。そうした閉塞的な状況でのストレスと運動不足解消に役立ったのが、事務所内の運動器具。さらに地元の人々です。「アフガニスタンの人々は、貧しいけれど客人を大切にす心優しい

人たちで、とかく行動制限の多い時期でしたが、精神的に助けられました」と、同時期に赴任していた次長は振り返っています。

予断を許さない状況

カルザイ大統領就任後も、「カブールは、武器を持った警備員が外国人居住区を警備し、治安維持軍の装甲車が幹線道路を走りかうのが日常の風景です。やはり、他の開発途上国とは違い、戦後復興のまっただなかにいることを実感します」という状況。国会下院・県議会選挙を経て、国会が開会され、正式政府の成立後も、「首都のカブールは、いまま治安面で予断を許さない状況」。しかし、「その一方で、最近ではショッピングセンターや外食店が増加してきており（残念ながら、安全上の理由でそこに足を運ぶことはできません



マザリシャリフ市内道路改修計画でエンジニアの事務所を守る警察

が)、想像していた以上に活気に満ち溢れています」といった変化も出てきています。

2007年6月まで勤務していた次長によると、「外に出られるのは先方政府との協議の時のみですが、カブール市内でも爆発事故が増えていることなどもあり、外出の際は人が近づいてきただけで、自爆テロの脅威を感じることがあります」ということです。こうしたなか、日本大使館などからの情報に常にアンテナをはる、不要不急の外出・夜間の外出は避ける、随時、複数の通信手段を確保しておくなどの対策をとりながら、業務を続けています。

ナショナルスタッフが大きな力

現地語（ダリ語）の問題や、治安状況から行動が制限されている日本人スタッフを補佐してくれるのが、ナショナルスタッフ。非常に大きな力となっています。開設当初からのスタッフであるファルクさんは、「友だちとは、困難なときに手を差し伸べてくれる人である」というアフガニスタンのことわざを引用し、日本への感謝を述べるとともに、同じアフガニスタンの仲間たちに、「この国づくりの機会を最大限に生かすために手と手を取り合っていこう。平和な国、安全な国、子どもたちが幼稚園や学校、大学に通い、花に満ち溢れた祖国を、涙なく笑顔に満ちた国を作っていこう」と呼びかけています。



JICSに関わりのある外部有識者による、国際協力についての提言、考察などをご紹介します。

アフガニスタン道路建設への支援に感謝

アフガニスタン公共事業省 副大臣 **ワリ・ムハンド・ラスリ**

アフガニスタンは山脈が広がる内陸の国で、幹線道路は人の輸送や物資の輸送に大切な手段です。多くのアフガニスタンの道路インフラは20年以上の紛争で破壊され、損傷しました。資源や生産能力の欠如は整備を妨げ、インフラの低下や損失を引き起こしました。

2003年に着工された日本のカブール・カンダハル間幹線道路の整備支援は、タイミングもいすばらしい協力でした。日本は復興資金だけでなく、入札過程や契約管理に関する人材も提供してくれました。

また、カンダハル・ヘラート間幹線道路の整備も日本政府により支援が行われました。この地域は安全面が懸念されていましたが、日本からの専門家チームにより、現在、整備が進行しています。

日本には、さらにボレホムリ・マザリシャリフ間幹線道路の整備に対する協力と、アフガニスタン中央部のパーミヤンからヤカワランまでの整備の資金供与をしていただきました。

日本の専門家やコンサルタントの助言は公共事業省へ大きな利益となり、道路の整備に多大な貢献をしました。アジア開発銀行や世界銀行や他のドナーとの多国間援助によって実行された道路計画を統一するうえでも、非常に役に立ちました。

私たちは、日本政府と国民の皆さんへ、アフガニスタンの復興に向けてのさらなる支援を望んでいます。アフガニスタン国民は、日本国民のご厚意と多大なる愛情に大変感謝しております。(要約)



支援の最前線に立つJICSマンの気概に感服

茨城大学人文学部教授 JICA客員国際協力専門員 **杉下恒夫**

旧支配勢力タリバンの復活で、最近のアフガニスタン情勢は、6年前に逆戻りした観もある。私が国際会議に出席するため、今年3月下旬にカブールを訪れた際も、会議場に向ってホテルを出発した直後、近くで6人が犠牲となる自爆テロが発生、首都の中心部でもテロと背中合わせにあることを実感した。

このときの出張のもう一つの目的は、日本のアフガニスタンの復興支援状況を見ることだった。プロジェクトの現場に足を運び、日本の復興支援を自分の目で確かめたかったのだが、前述のような治安状況では、カブール市内の国営放送施設整備事業などを見るのがやっと、市外の現場に行くことはかなわなかった。そのため、タリバンが跋扈する南部のカンダハル・グリシク間の幹線道路の整備事業を手がけている、JICSのカブール事務所で、貝塚英雄事務所長や日本の請負業者の代表の方たちに話を聞かせていただいた。業者の代表は、その時は治安悪化のためカブールに引き揚げていたが、直前まで、タリバンとNATO/ISAF（国際治安支援部隊）が戦闘を繰り返すカンダハルに踏みとどまって仕事を続けていただけに、話に迫真性があり、きわめて役に立つものだった。

JICSは、ODA事業の末端までチェックするという業務内容から、日本の開発協力のなかで、最も現場に近いところにいる組織の一つだ。アフガニスタンのように治安に問題のある地域においては、現場に近いということはそれだけ危険度も高い。だが取材中、事務所内には、あまり切迫した雰囲気を感じられず、不思議だった。その後、雑談の中で所長が、「タリバンの迫撃砲は精度が悪いからどこに飛んでくるかわからない。気にしていたら、仕事をやっていけないので、考えないことにしています」と冗談交じりに言うのを聞き、平静を装ってはいるが、彼らも強い不安の中にいることを知った。それでも、JICSスタッフを仕事に突き進ませる動機は何なのか。紛争地の復興支援の最前線に立つ日本人としての責任感以外には、考えられない。われわれはこうした同胞がいることを誇りに思うと同時に、彼らのことをもっと理解して、支援すべきだと痛感する。



攻撃で破壊された宮殿

Tsuneo Sugishita

読売新聞記者を経て2000年4月より現職。著書に『ジャーナリストが歩いて見たODA』、『NGOの世紀』など。

ジャワ島中部地震災害

JICS評議員会会長の視察とある小学生自由研究との出会い

日本とJICSの活動

2006年5月27日に、インドネシア・ジャワ島中部のジョグジャカルタ市沖合で発生したマグニチュード6.2の地震は、死者約5800人、負傷者約3万9000人、避難民約213万人、被災家屋約61万戸の被害を出しました。

日本はテントやシート、毛布などの緊急援助物資の供与、インドネシア政府に対する緊急無償資金協力(4億4400万円)などの支援を実施し、さらに同年8月15日に日本とインドネシア両政府間で8億9000万円の防災・災害復興支援無償資金協力が合意されました。JICSはそれらの無償資金協力の調達監理業務に従事

しています。また、地震被害が最も甚大であったパントゥール県で、小学校2校と中学校7校の建設を行っています。



テントの配給を受けた人々へのインタビュー

松本会長の視察

地震から1年後の2007年5月17日から24日、JICSの評議員会の松本洋会長がこの支援を視察するために、インドネシアを訪れ、相手国担当者、日本側担当者らと意見交換を行い、被災した小中学校や被災住民を訪問して、インタビューを行いました。

インタビューによれば、緊急援助物資



援助物資管理責任者に話を聞く松本会長(右)

のテントやビニールシート、毛布などの配布を受けた人々の約90%が満足しているということでした。供与されたテントは、ジョグジャカルタでは足りないほどでしたが、残った地域もありました。学校ではテントが仮教室として活用されました。ただテントの配布先リストが十分整備されず、効率的な活用やモニタリング、評価のためにも、その必要性が実感されました。また、災害復興支援無償援助による学校の新校舎建設では、品質を慎重にチェックするなど、しっかりした管理が行われており、JICSの業務は現地で高く評価されていました。



活用される日本の支援したテント

さらに松本会長の報告では、UNICEFや現地NGOの建てた簡便な竹の仮校舎や診療所がテントと本格復旧の端境期には有効であり、JICSもこういった国際機関やNGOとの情報交換や役割分担が必要であろうと痛感されたということです。

ある小学生の自由研究

松本会長は、東京都北区十条小学校4年の黒田裕(ゆたか)君の昨年夏休みの作文「ジャワ島中部地震」に感銘を受けました(以下、抜粋)。

夏休み、ぼくと父と母といとこの恵一君の4人で、大きな地震のあった、母のふるさとインドネシアのジョグジャカルタに地震のお見舞いの荷物を運んだ。7月28

日、友達からあずかったエンピツやノート、洋服やシャツ、約350kg、15個の荷物を成田空港から運んだ。



現地の人々と黒田裕君(右端)

ひさしぶりのジョグジャカルタの飛行場の建物はつぶれていた。着りくの時にかなりゆれた。かっ走路もでこぼこになってしまったらしい。

町の中でもホテルの壁にひびが入っていてこわかった。デパートのまどガラスが全部われて、使えなかったり、飛行場のロビーが無くなっていたりしていた。大学の建物もこわれ、家は無くなり、テントで生活をしている。

母の家族も地震の後一週間はテントで寝ていたそうです。

雨が降ればほこりっぽくなるけれどテントで生活している人は雨が降る前に家を作りたいと考えている。

地震でひがいにあったのに、みんなわかっていました。それがインドネシアの人のいいところかなあと思いました。

日本の友達からあずかった荷物を手渡した。みんなうれしそうに集まってくれた。これからもがんばってください。

山からの帰りジョグジャカルタの町の明りがとてもきれいだった。

メラピ山は今日もふんかしている。

松本会長はこの作文に接し、次のような感想を抱かれたとのことでした。

「援助の個人的体験の一般的共有が問われ、その観点からODAのモニタリング、評価が話題になります。裕君の行動とその発表からその基本が伝わってきます。このような心温まる素朴で地球上の隣人としての視点と感情が、ODA広報にもっと利用されるべきではないでしょうか」。

感染症対策

VVM普及に貢献 WHOより表彰を受ける



ベトナムでのワクチン接種

ワクチンバイアルモニター（VVM：Vaccine Vial Monitor）の普及に貢献したとして、2007年5月、JICSは世界保健機関（WHO）から表彰されました。

ワクチンは適正な温度範囲下で保管しないと変質してしまいます。VVMは、温度変化により変色する性質を持っています。そのため、これが貼付されていると、その容器に入ったワクチンが有効かどうかを容易に判定することができますというものです。

VVMが貼付されたワクチンの普及が始まったのは、ポリオワクチンからです。1990年代後半、ポリオ撲滅キャンペーンが世界各地で集中的に行われましたが、奥地に住む子どもにまでワクチンを効果的に投与することにVVMは貢献しました。JICSも、1997年度「タンザニアポリオ撲滅計画」で、いち早くVVMの貼付を入札仕様書で指示しました。その後、2000年度の「ベトナム麻疹抑制計画」では麻疹（はしか）ワ

クチン、2004年度の「カンボジア感染症対策計画」ではB型肝炎ワクチンと、当時まだ普及が進んでいなかった他のワクチンにもVVM貼付を拡大、ワクチン調達の際にはVVMの貼付を積極的に入札仕様に明記してきました。こうした姿勢がWHOに評価され、今回の表彰につながりました。

さまざまな感染症から子どもたちを守るため、予防接種が世界の隅々まで実施されるようになってきていますが、ワクチンの輸送や保存における温度管理が課題となっています。特に開発

途上国では、停電や保管冷蔵庫の不具合、運搬時の温度管理の不備などにより、ワクチンの保管温度が許容範囲を超えてしまうなどの困難を抱えています。

高温にさらされたワクチンは廃棄するよう規定されていますが、実際には保管中の温度上昇に気づかないまま効き目のなくなったワクチンを使用してしまうこともあります。逆に、まだ使用できるワクチンを一時高温下においていたという理由で廃棄してしまうケースもあります。ワクチンの温度耐性は、ワクチンの種類で異なるばかりでなく、同じ種類のワクチンであってもメーカーによって違いがあります。一つの冷蔵庫に

種類・メーカー・製造時期などが異なるワクチンが混在している、というのが予防接種の現場です。VVMが容器に貼付してあれば、使えなくなったワクチン

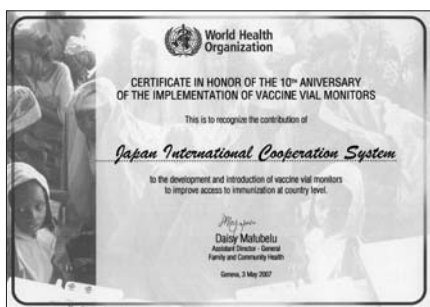
The vaccine vial monitor...

	<p>✓ Inner square lighter than outer circle. If the expiry date has not passed, USE the vaccine.</p>
	<p>✓ As time passes the inner square is still lighter than outer circle. If the expiry date has not passed, USE the vaccine.</p>
	<p>✗ Discard point: The colour of the inner matches that of the outer circle. DO NOT use the vaccine.</p>
	<p>✗ Beyond the discard point: Inner square is darker than outer circle. DO NOT use the vaccine.</p>

VVMを利用したワクチンの有効性の判定方法

- 中央の四角が白色：保管温度良好
- 変色しているが識別可：適温を超えた環境下にある（あった）が使用可能
- 周囲と同色：使用不可
- 周囲より濃い：使用不可。さらに高温状態が継続

チンを接種してしまうリスクを避けられるとともに、まだ使えるワクチンを廃棄してしまうというムダもなくなります。小さな、たった1枚のシールですが、接種する側・受ける側双方にとってのメリ



WHOから送られた感謝状

ットは大きいといえます。

前述した「麻疹抑制計画」によって初めて導入されたVVM付きの麻疹ワクチンについて、ベトナム保健省国家予防接種局長のゲン・ヴァン・クオン博士は、「コールドチェーンが未発達の前地においては、VVMが頼みの綱であり、ワクチンの配布頻度の低減、ひいてはコストの削減につながった。ヘルスワーカーたちはVVMを信頼しており、すべてのワクチンに貼り付けるよう要求している」と高く評価しています。

現在ではVVMの普及はかなり進んでおり、WHOが認証したワクチンメカ



キャップの上にVVMのついた供与ワクチン

一の大半が対応可能となり、ポリオや麻疹、B型肝炎をはじめ、破傷風、3種混合、5種混合、黄熱病など、多くのワクチンがVVMつきで調達できるようになっています。

【NGO紹介】

JICSは、設立10周年を記念し、1999年度に「NGO支援事業」を開始しました。この事業は、官民一体の国際協力活動の一層の発展に貢献することをめざし、開発途上国において援助活動を行う日本のNGOを支援することを目的としています。このコーナーでは、これまでに支援実績のある団体より、事業実施状況について報告していただきます。

タイ・デンチャイでの堆肥化による環境保全型農業

【環境修復保全機構 (ERECON)】

タイ・プラ県デンチャイ地区では、化学肥料や農業に依存した農業が展開されており、乾期には作物残渣の火入れも行われているため、土壌の劣化とともに池沼などの富栄養化による水質汚濁がきわめて深刻な状況にあり、土地生産性の回復と水環境の修復保全を進めることが緊急課題となっています。また化学肥料の購入費が農業経営を圧迫しており、農家も購入量を削減できる有機農業に関心を持っているものの、知識・資金不足により、有機農業に取り組むには至っていません。そのため、デンチャイ地区ボンパワイ副地区を対象として、堆肥化を軸とした有機農

業を推進し、農家が自立して環境保全型農業を営める生産環境の構築をめざしていくことを目的として、2006年3月から1年間の活動を展開しました。

その結果、現地の農家が環境保全型農業の重要性を理解し、6つの有機農業グループが組織され、グループごとにコンクリート堆肥槽を設置し、現地農家が有機農業を推進できる素地をつくること



現地農家に対する堆肥づくり指導

ができました。ほとんどの農家はワークショップで扱った有機農法を通じた環境保全型農業の意義や堆肥の効果を習得したといえます。さらに2006年12月に実施した堆肥化を軸にした有機農業に関するアンケート調査では、100%の農家が、「堆肥づくりを継続したい」と回答しており、農家

が自立して環境保全型農業を営める生産環境の構築をめざした第一歩が始まったと判断しています。

NPO法人環境修復保全機構 (ERECON)

2000年、複数の大学間の研究グループを母体にNGO環境修復保全機構が設立された。2002年に特定非営利活動法人環境修復保全機構となり、東南アジアを中心に草の根活動を継続している。

JICS支援実施年度：2005年度

対象国：タイ

支援対象プロジェクト内容

化学肥料や農業の汚染で劣化した土壌や悪化している環境を改善するため、堆肥化を軸とした有機農業を推進し、農家が自立して環境保全型農業を営める生産環境の構築をめざす。



「リレーエッセイ」 No.8

(超)高地ネタ

三上 綾子

(在ボリビア日本大使館出向)

ラパスは世界最高地点にある事実上の首都で、その標高は3600メートルと、富士山の頂上ほどの高さに街が広がっています。国土は高原地帯、渓谷地帯、そして平原地帯に大別され、実際には高地以外の占める割合の方が大きいのですが、ここでは(超)高地ネタを披露させていただきます。

1. 酸素が平地の3分の2：わずかな動きで、とにかく息が切れます。出張者は多かれ少なかれなんらかの負の影響を受けるので、酸素ボンベの用意など、受入側も最新の注意を払います。そういえば、低地のサンタクルスなどからは、よく消防車の援助要請がありますが、ラパス市からはあまり聞いたことがありません。酸素がないので、火事が減多に起きないというのがその理由とのこと。
2. 低圧：ここラパスでは気圧も平地の3分の2。日本から袋に入ったものを持ってくると、パンパンに膨らみ、ひどいときには破裂します。私はきな粉の袋がスーツケースの中で破裂し、服が和菓子のいい香りに染まりました。
3. 強い紫外線：ここに赴任してすでに5コ日焼け止めを空にしましたが、それでもシミは増殖の一途。また、サングラスは不可欠です。
4. 美しい景色：標高4000メートルの空の色は、宇宙に近いからでしょうか、吸い込まれそうな群青色。チチカカ湖、サハマ国立公園、ウユニ塩湖等々、高地ならではの絶景ポイントは尽きません。過酷と言われるラパス勤務ですが、この国は古くからの日系人の方々が築いてきた関係や、長年にわたるODAなどのおかげでしょうか、大変な親日国のため、毎日の仕事はとても快適で、かつやりがいがあります。



ウユニ塩湖

JICSの うごき

2007年度

第1回 通常評議員会・理事会を開催

2007年6月13日に、アルカディア市ヶ谷(千代田区九段北)において2007年度第1回通常評議員会と理事会が開催されました。

午前に行われた評議員会では、(1) 評議員会会長と副会長の選任、(2) 2006年度事業報告、(3) 2006年度決算書類・監査報告、(4) 役員を選任の4議案について審議が行われ、承認されました。

評議員会会長と副会長には、前期に引き続き松本洋氏と目黒依子氏がそれぞれ再任されました。

役員は、角田理事、市川理事が辞任し、讃井暢子氏、八木孝氏が新たに理事に選任されました。

午後の理事会では、上記(2)(3)について審議が行われ、議決されました。



また、評議員会と理事会の合間に役員・評議員同席のもと、本年5月17日から24日にかけてインドネシアにおいて行われた、松本評議員会会長によるJICSの実施した事業に関する現地視察の結果について、ご本人から報告いただきました。内容の詳細についてはTOPICSをご覧ください。

大島海洋国際高等学校生がJICS業務を体験

2007年8月13日、14日の2日間、東京都立大島海洋国際高等学校2年生の2人が、インターンシップのために来訪しました。将来、国際協力の仕事に就きたいという2人に、ODAのなかでのJICSの役割などについて説明を行いました。そして2人は、1日目は主に広報活動に関する事務作業、2日目はJICS職員へのインタビューなどを体験しました。

イラク案件担当職員へのインタビューで、現在イラクで利用されている救急車や消防車、パトカーなどが日本の

援助によるものであり、JICSがその調達を担当したことなどを知り、「実際に仕事をしている人の話はとても興味深く、現実的な知識になります。担当の方の仕事に対する熱意が感じられ、とてもかっこいいと感じました」という感想をいただきました。



お知らせ

キッズ向けホームページ『JICSとは』完成

JICSホームページに、JICSについてわかりやすく説明したキッズ向けコンテンツ、『JICSとは』が加わりました。イラストを多用し、JICSの活動の柱のうちの一つである「調達業務」をかみ砕い

て紹介しています。

「JICSって具体的に何をやっている組織なの?」「JICSってどうして作られたの?」このようなことを知りたい方、ぜひこの新コンテンツ『JICSとは』をご覧ください。



(www.jics.or.jp/soshiki/kids/index.html)

カンボジア地雷DVD完成 ご希望の方はどうぞご連絡を!

このたび、JICSが実施監理を担当した、「カンボジア地雷除去活動支援機材開発研究計画」(研究支援無償資金協力)の様子をDVDにまとめました。このDVDでは、本研究支援無償の背景や、

機材の現地試験の様子などをわかりやすく説明しており、日本語と英語の2カ国語でご覧いただけます。

ご希望の方には、このDVDを差し上げますので、お気軽にJICS代表メール

ドレス(jics@jics.or.jp)にご連絡ください。

